

文語歌曲 「村の鍛冶屋」

作詞者作曲者未詳

谷田貝常夫

最近見たるテレビに、村の鍛冶屋の畫像あり。土塗れの屋内にて瘦身の老人、一人金槌かなてこに向ひて槌を振るふ。鍬ならむ、今もかかる仕事せる者あるかとの感懐をいだくとともに、たちまちにこの歌想かぶひ浮うぶ。

一、 暫時しばしも止やまらずに 槌じち打うちつ響ひび

飛び散る火の花 はしる湯玉

* 赤く焼けた鐵から火花が飛び散り、強さを増すための焼入れで熱湯が跳ぶ
鞆たづの風さへ息をもつがず

* 革などで作つた送風のための鞆が、火の温度をあげようと絶えず風を送る
仕事に精出す村の鍛冶屋

二、 あるじは名高きいつこく老おやぢ爺

* 頑固で一本氣の一刻者・一國者

早起き早寝の病知らず

鐵てつより堅しと誇れる腕うでに

勝まさりて堅きは彼が心

* 心根は鐵よりかたいほどなり

三 刀はうたねど大鎌小鎌

馬ま鍬くわに作つく鍬くわ 鋤すきよ鉋なたよ

* 櫛のような齒のある、牛馬に引かせる鍬や農作業用の鍬

平和の打ち物休まずうちて

* 平和に貢獻する道具作りのための鐵打ち

日毎に戦ふ 懶惰らんだの敵と

* 怠け情おこたる氣持を持つまいと

四、 稼いぐにおひつく貧乏なくて

* 怠けず懸命にはたらけば貧乏に苦しむことなし

名物鍛冶屋は日日に繁昌

あたりに類るいなき仕事のほまれ

* 近在きんざいにくらぶる者なき、勤勉と良き仕事は自慢のたね

槌じちうつ響ひびにまして高し

* 評判は、槌じち打うちつ音ねより高し

このへ長調の歌、16分音符あり、同音連打ありて、鍛冶屋の動的音環境をよく表せるためか、幼き頃に聞き覺えたるならむ。

大正元年の國定教科書「尋常小學唱歌」に『かぢや』として掲載されたるも、作詞家も作曲家も不明なること惜しまる。

例のごとくに歌詞に變遷あり。昭和十七年、戰爭中なれば三番の「平和のうち物」など國策に不適と文部省「初等科音樂」にて三番四番を削除せり。又この時既に口語化への志向あり。二番の變更、讀みくらべられたし。

・ 初出 「鐵より堅しと誇れる腕に 勝りて堅きは彼が心」

・ 變更後 「鐵より堅いとじまんの腕で 打ち出す刃物に心こもる」

「鞆」の「ふいご」とされたるは、戦後の調べにて、語源よりして「ふいご」と改められたり。さらに戦後になりて新假字遣、文語排除の方針から、昭和二十二年には、題名すら『村のかじや』と換へらる。

・ 戦後に變更後の二番、次のごとし。

あるじは名高い働きものよ 早起き早寝のやまい知らず

永年きたえたじまんの腕で うち出す鋤 心こもる

戦後の國語表記改革、改悪により、如何に日本語は詩を失へるかの適例ここにあり。さらに工業化の進展により、村に鍛冶屋の減るにつれてこの歌、教科書から消えゆきたり、

嗚呼。

(平成二十九年十一月二十二日受附)